

「わかりやすさ」の功罪

企業経営漫談士 岡野実空

セミナーや研究会に臨むとき、私がつねに心がけている説明や質問への答えの「わかりやすさ」。私たちのような職業では特に生命線ですが、それはこのコラムも同様で、多忙な皆さんがいちいち考え込むようでは、恐らく2年もお付き合いいただけなかったと思います。しかし利点があれば、その奥に欠点が潜むのは世の習い。今回のコラムは、「わかりやすさ」の意義と同時に、その問題点を明らかにし、それを求め過ぎる現代の企業人に警鐘を鳴らします。

その1(功): 知識の「拡充」

アモルフラス研究の世界的権威で、女性として初めて日本物理学会の会長を務めた、慶応大学の米沢富美子名誉教授が、残念なことにこの一月半ば80歳で亡くなりました。私が愛読していたのは、先生のご専門や周辺領域について書かれた一般向け図書。その解説はとにかく例示が的確で、難しい内容が「わかった気」になり、いつもワクワクしながら私の好奇心を満たしてくれました。合掌！

それで思い出すのは、「経済学の巨人」J・K・ガルブレイスが、米沢先生より8年前、日経新聞『私の履歴者』(2004年)に書いた、「経済学者の論文はなぜわかりにくいのか？」という解説。それはまず「本人がよくわかっていないから」という理由に加え、「そのことを他人に知られたくないから」という捧腹絶倒の内容。トップからの意味不明な指示に悩む多くのミドルの共感を呼び、当時さまざまな場所で大きな話題となりました。(いまでも同じ)

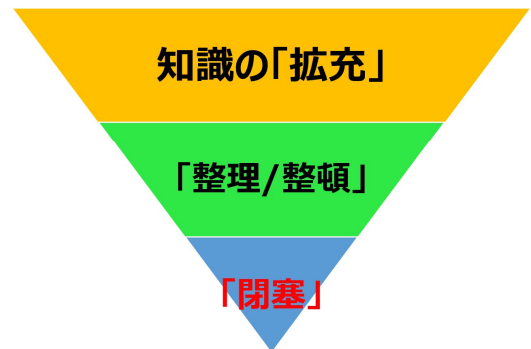
このような偉人たちに共通するのは、「わかりやすさ」のための努力を惜しまないこと。それによって、自分の専門を飛び越え、多領域との「新結合」によるイノベーションを生むという強い信念です。

その2(功): 知識の「整理/整頓」

月に一冊も読書をしないどころか、SNS やゲームに夢中で、新聞すら読まない社員が過半を占めるのが、多くの企業の現況。また自分の分担業務の標準化が進む中、各自が求める「知識」は「わかりやすい」ものに偏りがちです。しかもその陳腐化が加速し、頻繁に学び直しが必要になると、さらに「すぐ役立つ」という条件が加わります。

そこで急浮上するのは、情報や知識の「整理/整頓」の必要性。このコラムも目的は同じですが、ここでいう「整理」とは、「不必要なものを取り除くこと」、「整頓」とは「よく整った状態にすること」です。ということで、これまで私が訴え続けてきたのは、読書やセミナーを、自分の知識の「整理/整頓」をする手段として大いに活用することでした。

KM3-25 「わかりやすさ」の功罪



その3(罪): 知識の「閉塞」

しかし本当に恐ろしいのは、いま大半の企業人の行動が前記の2に偏り、ムダと見なしてその後1の知識「拡充」に向かわないこと。要は、概ね知っていることを「整理/整頓」し、それを仲間内で共有する快適さを求めるばかりで、先の偉人たちとは真逆の行動に陥っているのです。

以上のように、真の「学び」とは、それまで「わからなかったこと」や「知らなかったこと」から得るもの。しかもいつ役立つかも「わからない」。したがって、「無用の用」という本来の学習を避ける個人や組織は、明日のための知識習得に扉を閉ざし、あるとき突然、自らが「無用」になるのです。

かつて私が「企画提案力」のセミナーを長らく担当した電機メーカーM社。そこでは、即効性が求められる「漁業型」、何か月か試行錯誤しつつ修得に努める「農業型」、将来役立つかもしれない「林業型」と、3種の社内教育がバランスよく併存していました。しかし重電業界内でのいち早い業績回復を受け、高額報酬の開示役員数で、近年M社が我が国のトップに立ったのは、そのバランスが崩れた証に思えるのは、私だけの幻想でしょうか？

2019年3月4日 実空